

邪馬台国所在地論争に関する 1 考察

山本翔平

序

第 1 節 邪馬台国とは

第 2 節 北九州説と畿内説

序 款

第 1 款 北九州説

第 2 款 畿内説

考 察

序

誰しも一度は歴史の授業などで耳にしたことはあるだろう邪馬台国は畿内、九州、またはそれ以外のどこにあったのだろうか？邪馬台国の概要に触れつつ所在地に関する学説を紹介する。本稿では邪馬台国論争に関する諸学説、とりわけ九州説と畿内説についての理解について紹介すると共に、我が国の歴史観に関わる問題であることも究明してみたいと考える。

第 1 節 邪馬台国とは

邪馬台国とは、3 世紀前半、日本列島およびその周辺のどこかにあったとされる国である。ここで言う国とは今で言う県と思えばいいだろう。当時の日本列島とその周辺を中国では倭ないし倭国と呼称していた。そして『魏志倭人伝』では邪馬台国を 「女王の都する所なり。」¹と記述しており、邪馬台国とは当時の日本の都であったことがわかる。

¹ 松尾光『現代語訳魏志倭人伝』（KADOKAWA、2014 年）46 頁。

邪馬台国といえはまず思い浮かべるのは女王卑弥呼だろう。卑弥呼はまじないや呪術で国を治めたとされている女王である。しかし、『魏志倭人伝』では「景初2年6月、倭の女王、大夫難升米等を遣わして郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。」²とあり、卑弥呼は倭国の女王とされている。前述した通り、邪馬台国は倭国の都であるから、邪馬台国の女王卑弥呼とは厳密には誤りである。

ところでこの邪馬台国がどこに在ったのかという今なお続けられている論争は非常に有名である。様々な説があり、百家争鳴な状況ではあるが、とくに著名な2大学説が北九州説と畿内説である。そこで本稿ではこの2つの学説を中心として論じていく。

第2節 北九州説と畿内説

序 款

邪馬台国の存在した場所を知るためにはまず、当時の倭国があった場所を明らかにしなくてはならない。邪馬台国所在問題にとって重要なのが倭国の範囲である。『魏志倭人伝』を読み解くと、九州北部とその北側の島々は倭国に含まれていた可能性が高い。『魏志倭人伝』と、15世紀初頭の朝鮮で作製された世界地図では日本は南方に伸びていると書かれている。しかしそれは誤りであり、日本は朝鮮半島の東南海上から東方に連なっているので長きに渡り、誤った認識をされていた可能性も指摘されている。

『魏志倭人伝』には「南して、邪馬壱(台)国³に至る。女王の都する所なり。水行して10日、陸行して1月なり。」⁴とあり、邪馬台国は、九州北部から南へ遠方にあったと記されているが、認識されていた南が東だとすれば邪馬台国は九州北部からさらに東にいった

² 松尾・前掲・51頁。

³ 『魏志』での邪馬台国の表記は、邪馬壹国となっており、「やまいちこく」と読むのが正しいとする説がある。

⁴ 松尾・前掲・46頁。

場所に在った可能性が浮上する。つまり、畿内説が浮上してくる。このように『魏志倭人伝』の邪馬台国に関する記述では邪馬台国の正確な位置が不明瞭である。そのため、今日のような論争が展開されている。ここで代表的な学説である北九州説と畿内説をはじめに提唱した学者はだれであったのだろうか。この点について本稿では掘り下げて述べていく。

第1款 北九州説

まず北九州説だが本居宣長は著作の『馭戎慨言』にて『魏志倭人伝』の投馬国から女王の都までの陸路の行程が1月だという記述を1日の誤りではないかと述べたうえでこう述べている。

「さて1日だとすると、どの海辺から大和の京に到達するのは困難で、また1月だとすると、山陽道の半ば付近から陸路を上ったとするのか。そんなことがあるはずない。古、西国（関西以西の地域、主として九州地方）から大和に上るには、すべて難波津（現在の大阪府中央区付近にあった港）までは船で行くのがお決まりであった。」⁵。

つまり、畿内説を完全に否定している。また、これらの記述から本居はさらに魏と交流していた人物についても興味深い次のような見解も見せている。

「しかしこの時、かの国に使者を遣わした次第が記録されているのは、どれも本当の皇朝の御使いではない。筑紫（九州）の南のほうで勢力のある熊襲などの類だったものが、女王（神功皇后）の御名声が多く戒国にまでとどろいていらっしゃるのをいいことに、『女王の御使いである』と偽って私的に遣わした使いである。」⁶。

以上のように述べたうえで、上記の道順の違いからこの時の使者は大和地方からでなく九州地方から遣わされていて、また女王では

⁵ 本居宣長『馭戎慨言-日本外交史』山口志義夫訳（多摩通信社、2009年）26～27頁。

⁶ 本居・前掲・25頁。

ないものが遣わせた使者であると考えるのが自然だとまとめている。

第2款 畿内説

畿内説について提唱した学者として著名なのは新井白石である。新井は『古史通或問』で以下のように論じている。

「邪馬台国は現在の大和国である。その傍の斯馬国から奴国に至るまでは全て女王国境界にあるとみえるので、つまりこれらの国は今の筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後等の地名とみられる。けれどもその名は現在ではことごとく解明することはできない。」⁷

これはいままで多数の学者が邪馬台国畿内説を有力だと述べる時に使用してきたものだが、歴史学者ではない素人である私見をのべると、この部分には九州地方の地名ばかり出ており、最初の1文の「邪馬台国は現在の大和国である。」というところから大和＝畿内だと安易に考えてしまうのは少々厳しいのではないかと思う。というのも白石が『古史通或問』で述べている記述のほとんどは九州地方の国に関することだからである。

考 察

以上が北九州説および畿内説黎明期の学説である。これ以後、両説は激しく対立するのであるが、その全てを網羅することは本稿の手には余る。

だがここで、一つの疑問が生じる。果たして近畿のような遠い地方までを中国人は倭の範囲とみなしていたのだろうか。倭に関する最初の確かな記述のある57年に記された『漢書地理誌』では九州北部とそれよりも東の地域では文化や習俗の大きな差が見られた。中国の物で身を飾った王が君臨する九州北部を倭ととらえるなら、石

⁷ 新井白石「古史或問」『荒井白石著作集 第三巻』（吉川半七、1905年）388-389頁を現代語訳。

器を使い、古い共同体の原理を残して社会的階層の発達も少し遅れた東方は、考古学的にみて、九州北部の倭人とは別の民族社会とみられていた可能性が高い。しかし、3世紀頃になると近畿などの東の地方にも金属器は普及し、埋葬の習俗も九州から関東まで広く共有されていた為、この範囲が倭国として認識されていたとしても考古学的には疑問とされない。

そこで邪馬台国の所在を考える上では以下の観点からの考察が必要であるとされる（無論検討要素は以下に紹介する以外にも無数に存在するが）。

まずは、人口集中を示す沢山の住居址である。第2に他国との交易の証拠である他地域の土器の多量出土によって、その地域が経済的な核であったと推測される遺跡の存在である。そして第3に『魏志倭人伝』に記されている「卑弥呼以に死し、大いなる冢を作ること径百余歩なり。徇葬する者は、奴婢百余人とす。」⁸という記述である。つまり、大きな墓が見つからなくてはいけない。

まず九州説についてはよく佐賀県の吉野ケ里遺跡が邪馬台国と関連づけられるが、吉野ケ里遺跡は3世紀には既に衰え、大きな集落ではなくなっている。

次に近畿説については、近畿では先程の条件にあてはまる纏向遺跡群という遺跡が邪馬台国の位置について有力視されている。纏向遺跡の傍には大規模な前方後円墳が築かれている点から、3世紀において日本列島において経済的にも政治的にも中心性を保っていたと考えられる。近年の考古学的知見では近畿説のほうが有力だと思われるが、邪馬台国の存在は文献史学の問題であり、考古学では決着できない。纏向遺跡群の箸墓を卑弥呼の墓であるとみる説もあるが、『日本書紀』には、箸墓は第7代の孝霊天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命の墓と記されている。この倭迹迹日百襲姫命と卑弥呼が同一人物であるかは現時点では判明していないが、大変興味深い記述で

⁸ 松尾・前掲・53頁。

ある。しかし、別人だとしたら3世紀には天皇がいたとされているため中国に使者を送っていたとされる卑弥呼に天皇家からの圧力等
はなかったのかという疑問が残る。

邪馬台国所在論争は勝負がつきそうに見えて決着が難しい論争である。